

ドアを開けたら

よだ ひでと

トントントン。

だれかが部屋をノックした。「はい」と言って、わたしはドアを開けた。

「やあ、こんにちは」

そこには一匹の魚が立っていた。

「どうしたの？」って聞いたら、

「いっしょに泳ごうよ」

魚が尾びれでペタペタと音をさせて、入ってきた。

「でも、ここには水なんかないよ」

「だいじょうぶ、この部屋を海にしちゃうから。さあ、ぼくのせなかに乗って魚がねころんだ。」

「そんなことしたら、君がつぶれちゃうよ」

「だいじょうぶ。ほら」

魚がえらをばたばたさせて、わたしをよぶ。

あんまりしつこいから、

「ペしゃんこになっても知らないよ」

わたしはぎゅっと目をつぶり、

「えいっ！」と魚にとびのった。

ザブーン、と音がした。

目を開けたら、海の中だった。

わたしは魚のせなかに乗って、海の中を進んだ。

おひさまの光が、風にゆれるカーテンのように、わたしたちを手まねきしていた。

小さな魚のむねがやってきて、みんなでわたしをくすぐった。

赤むらさき色の海草がうでをからめて、わたしを引き止めた。

「このままずっと海の中にいたいな」

わたしが言ったら、魚がふり向いて、

「ほんとに、そう思うっ？」

「うん！ほんとっに」

そしたら、海も魚もみんな消えちゃった。

トントントン。

だれかが部屋をノックした。「はい」と言っつて、わたしはドアを開けた。

「はい、こんにちは」

そこには一羽の鳥が立っていた。

「どうしたの？」って聞いたたら、

「いっしょにとぼつよ」

鳥が長い足で、そろそろと入ってきた。

「でも、ここには空なんかいないよ」

「だいじょうぶ、この部屋を空にしちゃうから。さあ、ぼくのせなかに乗って」

鳥が羽をゆかに広げて立った。

「そんなことしたら、君がつぶれちゃうよ」

「だいじょうぶ。ほら」

鳥が羽ばたきながら、おいでおいでをする。

あんまりしつこいから、

「ぺしゃんこになっても知らないよ」

わたしはぎゅっと目をつぶり、

「えいっ！」と鳥にとびのった。

ビューン、と音がした。

目を開けたら、空の上だった。

わたしは鳥のせなかに乗って、空をとびまわった。

横一列にならんだ鳥たちの間をすりぬけたら、みんなびっくりして、さかさにちゅうがえり。

もっこり雲の中に入ったら、つめたくて気持ちがよかった。

赤い気球に乗った人たちが、わたしたちを見て手を大きく振っていた。

「このままずっと空の上になりたいな」

わたしが言ったら、鳥がふり向いて、

「ほんとに、そう思う？」

「うん！ほんとに」

そしたら、空も鳥もみんな消えちゃった。

トントントン。

だれかが部屋をノックした。「はい」と言っ、わたしはドアを開けた。

「どうも、こんにちは」

そこには一頭の犬が立っていた。

「どうしたの？」って聞いたら、

「いっしょに走ろうよ」

犬がスタスタと入ってきた。

「でも、ここには広場なんかないよ」

「だいじょうぶ、この部屋をジャングルにしちゃうから。さあ、ぼくのせなかに乗って」

犬がしゃがんだ。

「そんなことしたら、君がつぶれちゃうよ」

「だいじょうぶ。ほら」

犬がしっぽを振って、おいでおいでをする。

あんまりしつこいから、

「ぺしゃんこになっても知らないよ」

わたしはぎゅっと目をつぶり、

「えいっ！」と犬にとびのつた。

ザワザワ、と音がした。

目を開けたら、ジャングルだった。

わたしは犬のせなかに乗ってジャングルをかけ回った。

わたしたちが走ると、せの高い草たちが道をあけてくれた。

土けむりを上げてゾウのむれが走ってきた。

あぶない、つぶされるって思ったけど、犬は大ジャンプでむれをとびこえた。

ライオンの親子はあくびをしてわたしたちを見ていた。

「このままずっとジャングルを走っていたいな」

わたしが言ったら、犬がふり向いて、

「ほんとに、そう思う？」

「うん！ ほんとうに」

そしたら、ジャングルも犬もみんな消えちゃった。

とっても楽しかったけど、とってもつかれちゃった。

トントントン。

だれかが部屋をノックした。「だれ？」と言って、わたしはドアをじっと見つめていた。返事はなかった。

少ししたらまた、ノックの音がした。

「はい」と小さな声で言っつて、わたしはドアを開けた。

「こんにちは」

そこには、去年なくなったおばあちゃんが立っていた。

「おばあちゃん……」

おばあちゃんは、だまってわたしをだきしめてくれた。

そして、部屋に入ってきて、そつとすわつた。

「おばあちゃん、あのね」とわたしが言おうとすると、おばあちゃんは、

「おいでおいで」と手まねきして、ひざをトントンたたいた。

わたしはおばあちゃんのひざまくらで、ぐつすりねむつた。

トントントン。

ノックの音で目がさめた。

わたしは、「おばあちゃんー」と言っつていきおいよくドアを開けた。

ドアの向こうに立っつていたのはわたしだった。

「ただいま」とわたしが言っつた。

「おかえり」とわたしは答えた。

しばらくの間、だまって見つめ合つた。

それから二人で、ふふふとわらつた。

「ねえ、外へ出てみない？」とわたしが言っつた。

わたしは少し考へてから、「うん」と答えた。

部屋を出て、かいだんを一步ずつふみしめながら、時間をかけて一階へおりた。げんかんには、きいろいくつがそろえてあった。

「さあ、それをはいて」

うしろからわたしの声が聞こえる。

くつをはいて、げんかんのドアを開けて、外へ出た。

すずしい風が、ほほに当たる。

「気持ちいい！」

大きく両手を広げて、しんこきゆうをした。すんだ空気が体中にしみこんできた。「すつきりしたよ」ってふり向いたら、そこにはだれもいなかった。

わたしは、ゆっくりと前を向いた。

夕日がまぶしかった。

(おわり)